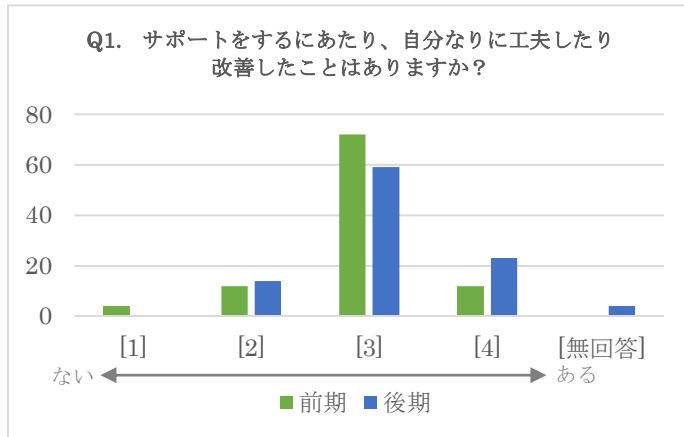
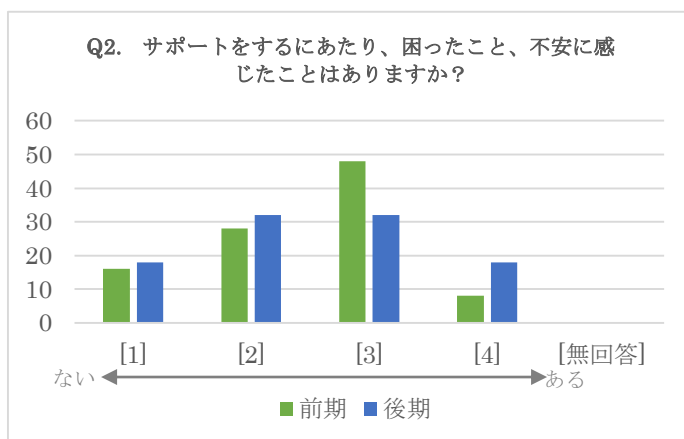


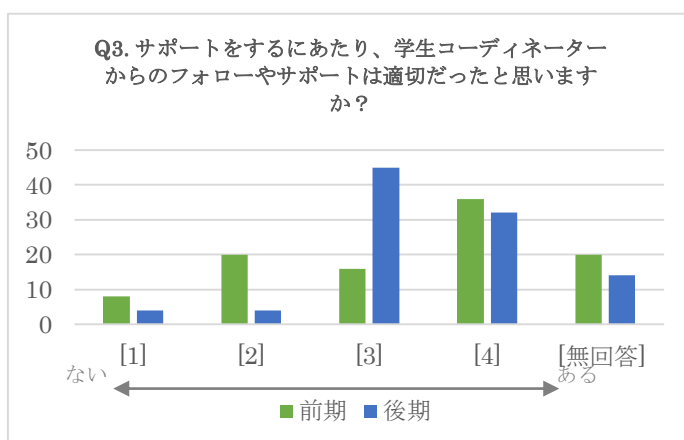
## サポートスタッフによるフィードバックの結果（前期・後期比較）



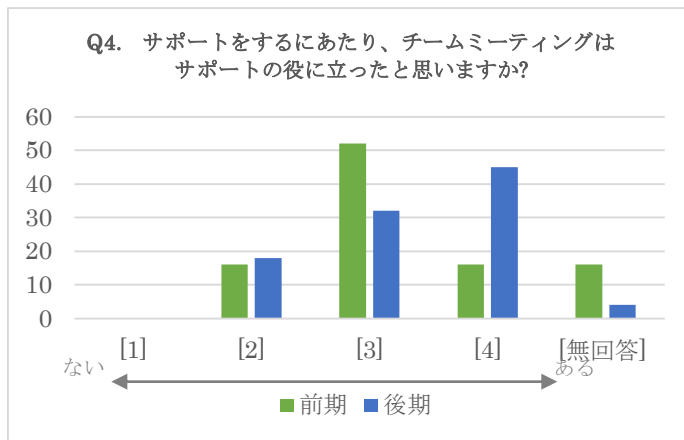
前期の回答では、とにかく慣れることで上達することを意識したものが多かったが、後期の回答では具体的な記述が多く見られ、実際にサポートを積み重ねていく中で必要な工夫を行っていたことがうかがえた。  
また、前期に比べ後期は自ら必要な準備を意識し、また余裕をもって障害学生に応じたサポートができている学生もいた。



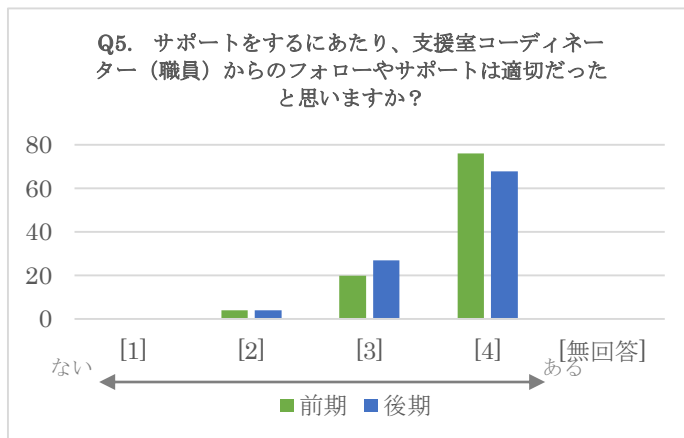
特に語学のノートテイクでの困り事を挙げるものが目立った。たとえば、「語学力の必要を感じた」と回答する学生が何名おり、語学力のあるサポートスタッフからは「ペアとの役割分担、タイミングが重要」との回答が寄せられた。  
また、サポートスタッフや障害学生との間で生じるコミュニケーション不足についての回答も寄せられた。



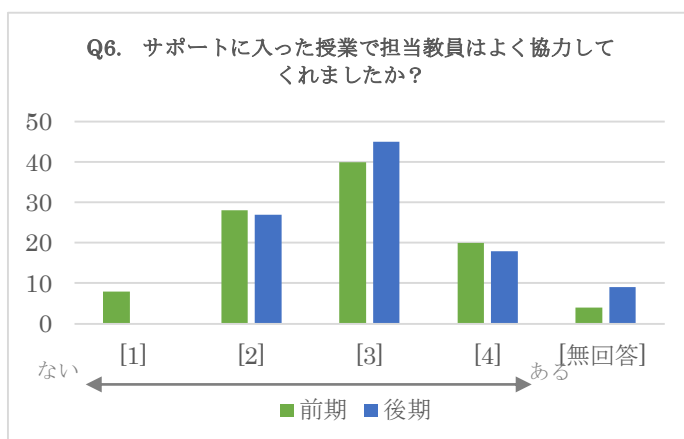
学生コーディネーターの存在すら知らないサポートスタッフもいた前期に比べると、後期では圧倒的に学生コーディネーターの認知度が上昇したことが分かる。  
その理由としては、前期で学生コーディネーターの弱まりを認識し、できるだけ学生コーディネーターが中心となるよう意識したことや、学生コーディネーター自身が役割内容について後輩に伝えたことなどが考えられる。



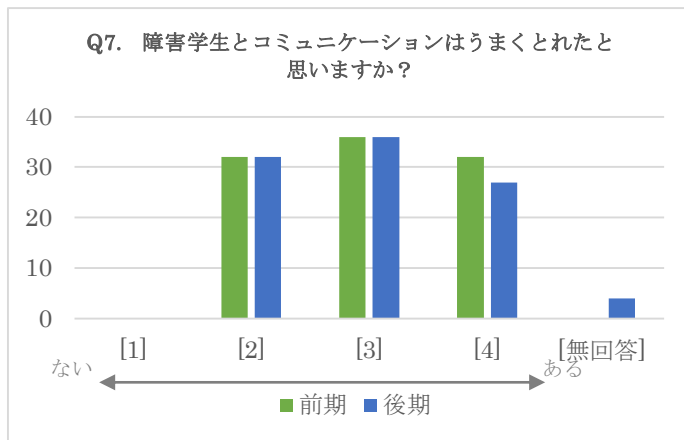
前期は「それなりに役立った（「3」の回答）」が多かったが、後期では「非常に役立った（「4」の回答）」が多く、実際のサポートに役立っていることが分かった。役立った点は主に3つで、①自分のサポートが適切かどうかを把握できた、②他の学生のサポート方法を聞いて、工夫の幅が広がった、③障害学生の意見を聞けて、自信につながった（不安が軽減した）であった。



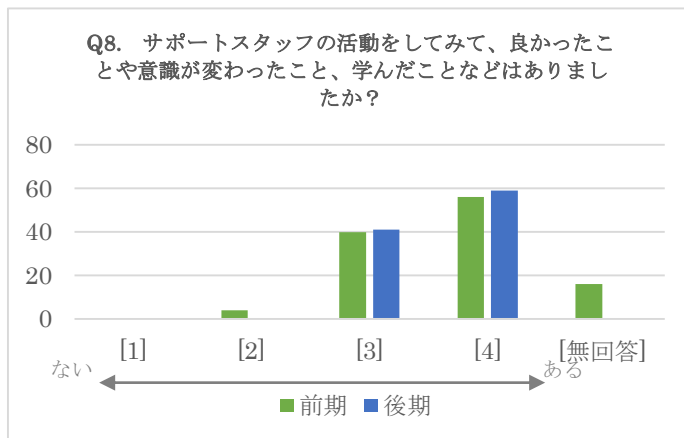
前期同様、おおむね「4（適切）」の回答が多数をしめた。  
職員と学生との接点が多かったことが理由に考えられるが、今後はより学生同士の接点を増やし、不安や悩みなどを聞き合える場を増やしたい。



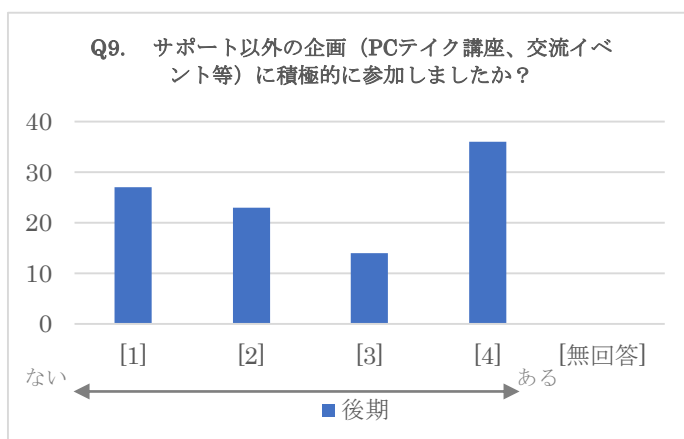
教員によって異なるが、前期同様、何らかの配慮があったとする「3」の回答が多かった。  
学生の回答から、気にかけてくれる先生は一定数いるが、テイクがしやすいようにゆっくり話す先生が少ないことも分かった。  
たとえゆっくり話すことが難しくても、補助教材を渡したり、テイカーの存在を他の学生に説明するといったことで、サポートがしやすくなっているという声もあった。



前期と後期とで結果はほとんど変わらず、「とれなかった」という意見もあった。  
コミュニケーションをよくとれたと回答した学生たちは、支援室の企画にも積極的に参加している学生が多かった。  
障害学生、サポートスタッフともに積極的に話しかけられるよう、支援室職員が促していくことも必要と思われる。

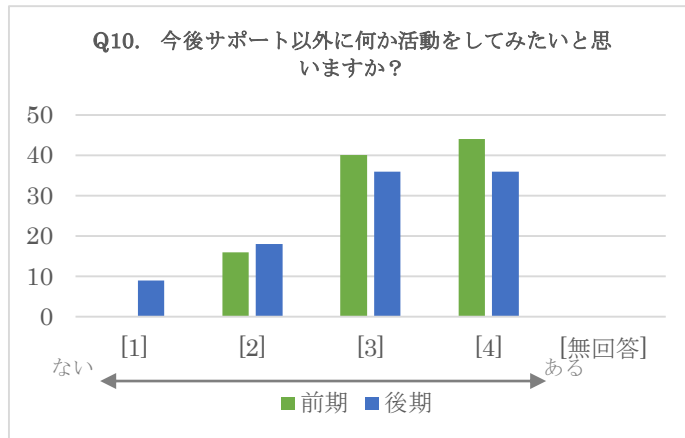


後期は 100%の学生が何らかの変化を感じていた。一番多かったのは、「障害に対する考え方・意識が変わった」というもの。その理由は、直接障害学生と接する中で、「特別な意識がなくなった」というものや「普段考えないようなことを考えた」といったように、障害学生との出会いから生れた変化を挙げる学生や、他の学生の話聞くことで勉強になったというものが多かった。



前期よりも学生が主体となる企画が多かったため、約半数の学生がそれらの企画に参加していた。参加することで、実際のサポートに役立つだけでなく、知り合いも増えるため、こうした企画に参加した学生ほど、支援室との関わりも密になっていると感じられた。

※ 後期のみの設問



就職活動等で時間的に参加する余裕がないという学生をのぞき、多くの学生が何らかの活動を望んでいることが読み取れる。最も多かったのは、他大学交流と、支援室内の全体交流会であった。